



日本レイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.88

日本レイ・アームストロング協会（ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF）2016年1月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL:047-351-4464 FAX:047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp
ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

平成27年12月19日(土)、あのクラシックの殿堂「紀尾井ホール」(東京・千代田区紀尾井町)で、記念すべき初のホール主催ジャズコンサートが開かれた。いわばカーネギーホールでのベニー・グッドマン・コンサート。出演はもちろん、外山喜雄とデキシシーセインツ。司会は元フジテレビアナウンサーの露木茂さん、解説は今や日本のジャズ評論家第一人者、瀬川昌久さん。ゲストに前田憲男さん(p)、白石信さん(スティール・ギター)ら豪華メンバーを迎えての、紀尾井クリスマスコンサート「ニューオーリンズ・ジャズと素晴らしいサッチモの世界」——午後4時、さあ開演です。
(小泉良夫)

新日鉄住金ソリューションズプレゼンツ
Kioi Hall
20th
1999年開館
10000名収容

紀尾井クリスマスコンサート2015
ニューオーリンズ・ジャズと
素晴らしい
サッチモの世界

2015年
12月19日[土]16:00 開演
紀尾井ホール

主催：公益財団法人 新日鉄住金文化財団
協賛：新日鉄住金ソリューションズ株式会社
後援：日本レイ・アームストロング協会
協力：ジャズ観覧ペイサー JAZZ SPOT J 日本ポピュラー音楽協会



左のイラストは、当日、入場のみなさまに配布されたプログラム、解説などを納めた素敵なパンフレット=デザイン：鈴木啓司さん。そして、熱演するセインツのレギュラー・メンバー。(左から右へ)外山喜雄、恵子、広津誠、粉川忠範、サバオ渡辺、藤崎羊一。写真下は、前田憲男、白石信、松本耕司、後藤雅広のみなさんを加えてフィナーレのクリスマスソング・メドレー



クラシックの殿堂「紀尾井ホール」で初の主催ジャズコンサート
“ジャズの王様”サッチモの世界を存分に再現！
 前田憲男さん、白石信さん…重鎮ゲストがデキシシーセインツと共演

露木茂さんの円熟した司会で第1部のオープニング。紀尾井ホールはことし20周年。そんな歴史の中でも初めて主催するジャズ。800席満杯のお客様の期待も大きい。当然、ニューオリンズが生んだ“ジャズの王様”サッチモこと、ルイ・アームストロングの世界が再現されることになる。ステージ背面の巨大なスクリーンに若き日のサッチモ、ダニー・ケ



露木茂さん(左)の司会でオープニング。右は外山夫妻

イと共演した映画『5つの銅貨』で「聖者の行進」を歌う2人の映像(写真下)などが映し出される。以後、全編を通じて終始、関連する映像や画像がここに映し出されて



いく。なかなかのアイデア。サッチモと外山さん、外山夫妻のニューオリンズでのジャズ武者修行の思い出話なども次々と…。



故郷ニューオリンズを偲ぶテーマで開幕
ジャズ前史の「ラグタイム」へと移って…

演奏は、セインツによるサッチモのオープニングテーマ「南部の夕暮れ」でスタート。故郷のニューオリンズを離れ、シカゴ～ニューヨークへと渡っていったサッチモの心には、この南部の夕暮れが深く刻み込まれていたのだろう。どのステージでも、サッチモはこのテーマで幕を開けた。1963年4月、名古屋市公会堂で夜の公演を聴いたというタイムファイブの勅使河原貞昭さんは「このテーマ曲とともに幕が上がり、憧れの人サッチモが目の前に現れると、もう涙、涙…でした」と、語ってくれたことがある。



関泰子さん(vln)と後藤千香さん(p)らを加えてのジャズの原点「ラグタイム」

次いで全米最大のヒットとなった「ハロー・ドーリー！」。1964年、全世界に旋風を巻き起こしていたあのビートルズを抜いてヒットチャートの1位に踊り出た曲。1969年には



バーブラ・ストライサンドの主演で映画化もされている。ニューオリンズのステージでも、外山さんが、♪Hello, Dolly! This is Japanese Louis…と歌うと、これはもう大うけする。この日のセインツのレギュラーメンバーはいうまでもなく、外山喜雄(tp,vo)・恵子(p,bj)、広津誠(cl)、粉川忠範(tb)、藤崎羊一(b)、サバオ渡辺(ds)のみなさん(写真上)。

ステージは変わって、サッチモが少年時代に聴いたジャズの原点、「ラグタイム」に入る。そう、ラグタイムと言えどこのお二方、関泰子さん(バイオリン)と後藤千香さん(p)。さらに、かつてセインツのメンバーだった、後藤雅広さん(cl)、セインツともしばしば共演している松本耕司さん(tb)が加わる。恵子さんはバンジョー。曲は「メイプルリーフ・ラグ」、「ジ・エンターテイナー」。何かうっとりとし聞き惚れてしまう。2曲だけでは本当に聞き足りなかったなあ。

バンジョーが奏でる哀愁を帯びた賛美歌
恵子さんの“バンジョー物語”も披露される

関さんとピアノの千香さんは退いて、演奏は初期のジャズの行進曲「ハインソサエティー」へ。この曲のクラリネット・ソロはとても難しく、当時バンドがクラリネット奏者を雇うとき、オーディションの課題曲ともなったという。ジャズに大きな影響

を与えた教会音楽に移り、賛美歌から「リード・ミー・セイビアー」、後藤さん(c1)と恵子さんのバンジョーが好演(前ページの写真下段)。「リード・ミー・セイビアー」はジョージ・ルイス(c1)の演奏でも有名な賛美歌。そして、恵子さんの奏でるバンジョーは、このジョージ・ルイスのバンドにいたローレンス・マレローの名器。1963年から65年にかけてジョージ・ルイスがニューオリンズ・オールスターズを率いて3年連続で来日したが、マレローは59年に他界してしまっていた。外山夫妻がニューオリンズに滞在していた1968年暮れ、ジョージ・ルイスも他界、夫妻はそのジャズ葬式に参列している。マレローのバンジョーは、彼の死後、世界各地のバンジョー演奏家や収集家の憧れとなり、ぜひとも彼のバンジョーを譲って欲しいという声が夫人に寄せられたが、夫人は決してこれを手放さそうとしなかった。



そこへ恵子さんが登場する。恵子さんも滞在中、ニューオリンズで何か良いバンジョーがないかと探していた。無理とは分かっていたが、ニューオリンズのジャズ仲間らの紹介で夫人を訪ねると、彼女はこういって、恵子さんを泣かせた。「夫は元気だったらジョージと一緒に日本へ行っていただろうに…残念ながらそれはかないませんでした。このバンジョーはあなたに託します。夫の代わりにせめてバンジョーだけでも、日本へ連れて行ってやって欲しいんです」。恵子さんの演奏する「リード・ミー・セイビアー」がどこかうら悲しく響くのは、こんなエピソードを秘めているからだろう。

ニューオリンズ伝統の“ジャズ葬式”も登場 哀しみの葬送曲は一転、軽快なパレードに

次に登場した伝統の“ジャズ葬式”もニューオリンズ独特のスタイル。外山喜雄とセインツらのメンバー、それに早稲田大学ニューオリンズジャズクラブのマネージャー、都築太一さん(tp)率いるブラスバンド・メンバー7人が1階客席背面ドアから重々しいニューオリンズの葬送曲を奏で行進してくる。…と、客席半ばから今度はいきなり軽快なパレード曲に変わる。そう、教会での荘厳な葬儀のあと、参列者達は哀しみに包まれて埋葬地に向かう。そして、埋葬が終わると牧師さんが諭す。「天国に向かっ



た死者には、もう苦しみも哀しみも貧困もないのです。この世の悩みから解きほぐされて天国に召されていったのです」と。葬送曲は一転して楽しい行進曲に変わる。傘を手にした参列者によるセ

カンドラインのパレードが始まり、華やかに傘が踊る。会場では、恵子さんが傘を持って先頭に(写真左側)。

全員がステージに戻ると、今度はゴスペル曲「ダウン・バイ・ザ・リバーサイド」(写真下中央)。お客様を巻き込んでの大合唱となる。♪Down by the Riverside(川辺に降りて武器を捨てよう)、Study War NO More(戦争はもういやだ)…。

こうした背景の中でジャズが生まれ、ルイ・アームストロングが産声を上げる。ここでステージにジャズ評論家の瀬川昌久さんが登場(写真上)。瀬川さんは、1950年代にニューヨークに銀行員として滞在中、“ジャズ一筋”だったとか。今やジャズ、ミュージカル、ポピュラーなど含めた音楽評論の第一人者で、先ごろ文化庁長官表彰も受けられている。

「ジャズの生成、発展を、身を持って体験 ジャズの基盤を作ったのがルイなのです」

「ルイが生まれたのは1901年で、ゴスペル、賛美歌、農園労働者のワークソング、ブルースなどが織りなされていくのです。ルイはこうしたジャズの生成、発展を、身を持って体験している。彼は1920年代、師のキング・オリバーの招きでシカゴへ上り大活躍、こうしてニューオリンズで生まれたジャズが各地へ広まっていたのです。インプロビゼーション(即興演奏)やスイング感も彼が広めていきました。彼こそが今のジャズの基礎を作っていた人なのです」

おや、おや！？洗濯板やら頭をとかす櫛、カズーなどが登場して来ました。楽器がなくても、身近なものを何でも使ってスイングさせ、ジャズにしまった歴史の一コマを再現して見せる。貧しかったニューオリンズでは、フライパン、バケツ、スプーン、ボトル…身近なものが何でもかんでも楽器になってしまう。そんな場面をちょっぴりご紹介。

サッチモの魅力を遺憾なく発揮した名曲、名演 外山さんがそのソロを見事なまでに再現させ…

そんなサッチモの魅力を遺憾なく発揮している名曲、名演を2曲。「ウエストエンド・ブルース」と「ディッパー・マウス・ブルース」。瀬川昌久さんによると前者の曲の始めに挿入されたカデンツァという即興演奏がまた素晴らしいこと。後者のブルースでは、作曲者のキング・オリバーのトランペット・ソロをさらに発展させたサッチモのソロが聴き所だという。外山さんがその2曲のサッチモのソロを見事に再現させ(写真左)、静まりかえった会場に響き渡らせる。セインツのレギュラーメンバーによる圧巻の演奏だった。

ここで20分の休憩。会場1, 2階ロビーには、サッチモ・グッズの世界的コレクターとして知られる佐藤修さん(ポニーキャニオン社長、日本レコード協会会長など要職を歴任=写真右中央)のお宝がズラリと展示され、お客様の驚愕の眼を誘う。垂涎のLPレコードのジャケットは壁面いっぱい計36点。DVD、写真、ポスター、書籍、ディスコグラフィ、サッチモ出演映画のパフレットなども多数。サッチモ人形があちこちで歯をむき出して愛嬌を振りまく。「オー・イエー！ みなさん、存分にお楽しみいただいていますか？ ジャズは、本当に素晴らしいんですよ」と、呼びかける声が聞こえてくるようだった。20分の休憩時間ではとても見切れない。いつかどこかで大々的な展示会でもやって欲しいですね。



ズ武者修行、拳銃と麻薬のはんらん驚かされたことも…「今でも小学校の入り口に拳銃の持ち込み禁止などという掲示があるんです」と外山さん。そういえば、昨年夏、ニューオリンズの高校を訪れたときなど、入り口に高性能の金属探知機が備えられていたことには驚かされた。夫妻はそんな現地の悲惨な実情に触れ帰国後、日本レイ・アームストロング

協会(WJF)を創設(1994年、昨年21周年)し、「銃に代えて楽器を！」と、

すでに現地の貧しい子供たちにトランペット、トロンボーン、クラリネット、サクソなど計830点超も送り届けている。サッチモが少年時代に銃を発射して、少年院に送られたこと、ここでトランペットと出会い、世界的な音楽家として成長していった…そんなことも外山夫妻の頭から離れないのだ。

東北大震災のさいの津波で楽器などすべてを流されてしまった現地、気仙沼、多賀城、石巻の子供たちのバンドに「今度は私たちが“恩返し”する番です」とニューオリンズから楽器がプレゼントされてきたのも、外山夫妻の支援の積み重ねがあつてのことなのです。

移民船で渡米、ジャズ武者修行した5年間 外山夫妻の青春と帰国後の活動もたっぷり

この日のステージでは、演奏だけでなく、外山夫妻のいろいろと楽しい思い出も紹介された。外山さんがまだ早稲田大学の学生だった1964年、来日したサッチモの楽屋に入り込んだ外山さんは、彼の目の前で彼のトランペットを吹いてしまったこと、そんなサッチモに憧れて、卒業、結婚後、夫妻は移民船でニューオリンズに渡り、5年間(1968~73年)のジャ

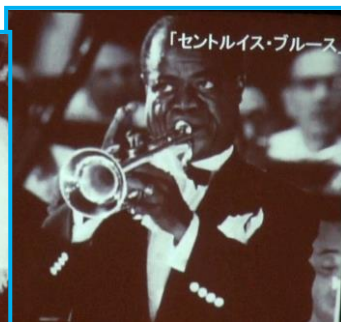
ウイントン・マルサリスさんから感動のメッセージ 紀尾井ホール20周年、初めてのジャズを祝って

<第2部>幕開けとともに、あのニューヨークの殿堂「リンカーン・センター」からニューオリンズ出身の音楽監督、ウイントン・マルサリスさん(tp)からのお祝いのビデオ・メッセージが映し出された(写真右)。ご紹介しましょう。



「こんにちは。リンカーン・センターのウイントン・マルサリスです。本日皆さまと紀尾井ホール20周年を祝い、レイ・アームストロングを感じただけのことを嬉しく思います。紀尾井ホールが初めてジャズを選んでくれたことは、素晴らしいことです。ジャズはすべての国境と人類の壁を超え、祝福する力があります。ブルース、スウィング、即興、これがジャズです。最後に私から皆さまへの小さな贈り物です。聴いて下さい」と彼はおもむろにトランペットを取り上げると「聖者の行進」を軽やかに奏でた。

1938年1月、ベニー・グッドマンがNYクラシックの殿堂「カーネギーホール」に登場して以来、ジャズの名声が高まり、ホールの名声も高まっていった。ここ紀尾井ホールもジャズファンから愛される第一歩を踏み出し



たに違いない。このマルサリスさんがバンドを率いて姿を現すことも、決して夢ではない。

続けてスクリーンには、レイ・アームストロングの音楽が大好きだったというクラシック界の巨匠、レナード・バーンスタインとレイの歴史的なコラボレーションが映し出される(写真下)。1956年7月、バーンスタイン率いるNYフィルハーモニー88人との共演。サッチモにとっても長年の夢の一つだった。曲は「セントルイス・ブルース」。聴衆の中には当時、既に盲目となっていた作曲者のW. C. ハンディ(83歳)が目を潤ませている姿もあつた。

サッチモとクラシックの巨匠との歴史的な共演 映像のあとにその代表的な名曲を続けて2曲

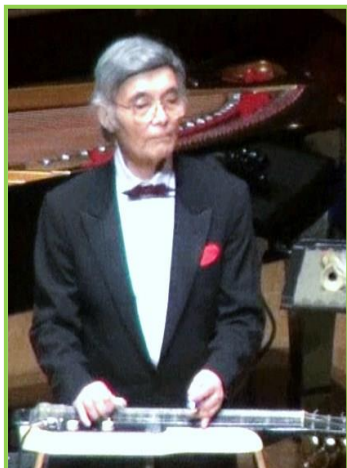
サッチモのトランペット・ソロをフィーチャーした映像での素晴らしい演奏のあと、(今回の映像では割愛されたが)バーンスタインが、聴衆にこう語りかけている。「私たちの演奏したセントルイス・ブルースはレイの演奏を真似してやった、大げさな模倣に過ぎません。彼の演奏こそ、リアルで真実に満ち、正直で、シンプルで、気高くさえあるのです…」と。

もちろん第2部の演奏は、セイントのレギュラーメンバーによるこの「セントルイス・ブルース」で幕を

開けた。次いでジャズの代表的な名曲「ベイゼン・ストリート・ブルース」、さらに永遠のヒット曲「ホット・ア・ワンダフル・ワールド(この素晴らしい世界)」が外山さんのヴォーカルも交えて披露される。この曲を聴くたびに、あのベトナム戦争の最前線に向かう若い兵士らの前で歌ったサッチモの姿が思い出されてならない。

ハワイアンなどポピュラー音楽の世界にも足跡 スティール・ギターが紀尾井ホールに初登場！

“サッチモとポピュラー音楽”——第2部でサッチモの世界はジャンルを超えて、さらに広がっていくことが紹介される。まずはハワイアン！ スティール・ギターとも共演している…となるとこの方、日本のハワイアン界の重鎮、白石信さんの登場(写真右)となります。紀尾井ホールにスティール・ギターが登場したのもこれが初めてという。曲は日本でも人気のある「小さな竹の橋」。そして、サッチモ旋風は日本にも！となった、南里文雄さんとディック・ミネさんの共演でヒットした「ダイナ」。ベースの藤崎さんが日本語で♪ダイナ、私の恋びいーと…と熱唱、会場に笑顔が広がる。



続くゲストは前田憲男さん(p=写真右)。芸術祭奨励賞など数々の賞を受けられているが、ジャズ界の最高峰である“南里文雄賞”という素晴らしい勳章も！ 曲は前田さんとセイツイツのリズムセクションを加えての「明るい表通りで」、「世界は日の出を待っている」。セイツイツのレギュラーとともに「バラ色の人生」。華麗な演奏が終わって、露木さんが前田さんに伺う。「先ほどのリハーサルでは、頭のところをちょっと音合わせしただけでしたが、あとはぶっつけ本番なのですか？」。前田さん、「ま、ジャズっていうのはそんなもんですよ。ぶっつけ本番が一番面白いんです」。露木さん、「前田さんの頭の中では、4ビートのものを16ビートのように細かく刻んでいるんでしょうね」。前田さん、「そんな、深くは何も考えていませんよ。適当にやるという…」。軽妙な会話が笑いを誘う(写真上)。



フィナーレは楽しいクリスマス・ソングのメドレー アンコールは「聖者の行進」でセカンドラインも

いよいよフィナーレ。“クリスマスコンサート”と銘打っているのですから、ここは当然、クリスマス・メドレー。「ホワイト・クリスマス」、「ジングルベル」…この日の出演者のみなさんが全員、次々とステージに上る。サンタの赤い帽子をかぶったセイツイツ。「年に1度、薄くなった頭を隠し…」と露木さん。笑いの渦。クリスマス・メドレーが終わっても、拍手は止まず、ここはアンコール。もちろん曲はサッチモとジャズの原点ともいえる、燃えるような「聖者の行進」。ブラス隊がステージを降りて、客席をパレードする。恵子さんが傘を客席に配って、お客様もセカンドラインに加わり、ステージにも上る(写真下)。パレードを追うと、会場のあちこちにお馴染みの顔が飛び込んでくる。日本ルイ・アームストロング協会(WJF)の会員のみなさん、「サッチモの旅」のお仲間…あの顔、この顔…ずいぶんと皆さま駆けつけて下さったんですねえ。本当にありがとうございます。瞬く間の2時間半だった。

それにしても、このコンサートジャズ前史のラグタイムからジャズの原点、賛美歌、ゴスペル、サッチモの名曲、名演、ポピュラー音楽への発展など、どのジャンルを取っても、2時間以上のコンサートが出来上がってしまう。それをたっぷりと凝縮してお届けしたプログラム、みなさん、サッチモとジャズの魅力を存分に味わっていただけたのではないだろうか。クラシックの殿堂とジャズが一体となった素晴らしい一日でもあった。



主催:公益財団法人 新日鉄住金文化財団
協賛:新日鉄住金ソリューションズ株式会社
後援:日本ルイ・アームストロング協会
協力:ジャズ喫茶ベイシー/JAZZ SPOT J
日本ポピュラー音楽協会



画期的なジャズ・コンサートの成功！この上なく光栄なことと皆さまに感謝！

実を結んだサッチモ生誕100年記念などWJF数々の活動

——外山喜雄・恵子

“クラシックの殿堂”紀尾井ホールが初めて自主公演でジャズを取り上げ、その記念すべきオープニング・コンサート『ニューオーリンズ・ジャズと素晴らしいサッチモの世界』を私どもデキシーセインツが担当、お客様、ご出演いただいた皆様、主催の紀尾井ホールと新日鉄住金文化財団、全員にお喜びいただき無事終了しました。

日本の‘ムジークフェライン’とも呼ばれる紀尾井ホールの素晴らしい音響に感激



こんな立派な紀尾井ホールを満席にして…フィナーレの盛り上がり、サッチモが微笑みかけた！

1947年のサッチモNYタウンホール・コンサートやボストン・シンフォニーホール等、残響の素晴らしいクラシックホールでのライブレコードは、名盤として今も多くのジャズファンに愛されています。今回、日本の‘ムジークフェライン’



(ウイーン楽友協会ホール)と呼ばれる紀尾井ホールで演奏させていただき、ホールの響きを実感した出演メンバーは大感激。そしてお客様からも素晴らしい音だった！！という声を沢山いただきました。

楽器の音はすべて生音、ボーカルのみマイクを使った、ホールの音響を最大限に生かした方法を取り、紀尾井ホール制作部長、山口真一さんの「生音とホールの響きを大切に」というポリシーが最大限に生かされた画期的なコンサートとなりました。サッチモ・タウンホール・コンサートの当時の写真(上)が残っています。写っているマイクは3

本・・・1本は録音用、他の2本はサッチモとトロンボーンのジャック・ティーガーデンのボーカル用。今回のコンサートでは、まさにサッチモのタウンホール気分・・・を味わわせてもらいました！ 山口さんによると、ホールのフロアの下には、ウイーン楽友会ホールに倣って箱型の空間があり、楽器のような構造になっているとのこと。2015年を素晴らしい体験で締めくくらせていただいで感謝！

NYリンカーン・センターでは13ヵ月シリーズ
こちら『ジャズ創世期の旅』等で盛り上げる



「ケン・バーズのジャズ」DVD版(日本パイオニアLDC(株)2000年版)表紙のコルネットは外山喜雄所有の1910年頃ヨーク製

GOT THAT SWING: Jazz at Lincoln Center, in New York City, is celebrating the 100th anniversary of Louis Armstrong's birth, taking advantage of the doubts over just when that is. Armstrong celebrated his birthday on July 4 and said he was born in 1900. But some scholars say he was really born Aug. 4, 1901. So starting on the Fourth of July this year, Jazz at Lincoln Center will honor three aspects of Satchmo's career for the following 13 months: his virtuosic trumpet playing, his understanding of how to play the blues, and his role as an international ambassador and humanitarian. "Trumpeters will be coming from all over the world to play his music, in their own style," said Grammy-winning trumpeter Wynton Marsalis, artistic director of Jazz at Lincoln Center.

21年前、日本レイ・アームストロング協会が発足して間もなく、例会で「レイ・アームストロングと創世期のジャズ」、「サッチモと辿るジャズの歴史」等シリーズ・コンサートを開始しました。きっかけは、1900年の独立記念日、7月4日生まれだと思われていたサッチモの誕生日

が間違っていた事でした。ニューオーリンズの教会でレイの洗礼記録が発見され、本当の誕生日は翌年1901年の8

平成13年度 文化庁芸術祭参加
ルイ・アームストロング 生誕100年
ジャズ創世期の旅
ジャズ誕生とサッチモ アーリージャズの軌跡を追って

日時：平成13年10月25日(木)
開演 18:30

場所：銀座 ヤマハホール

一般 4,500円 会員 4,000円
全席指定 (日本レイ・アームストロング協会)

主催：日本レイ・アームストロング協会
共催：有ノラ・ミュージック

演奏：日本レイ・アームストロング協会
小山真樹 (TP), 宇野浩 (TP), 清水邦紀 (CL, SAX),
田辺徳男 (T, SAX), 鈴木孝二 (CL, SAX), 杉川忠昭 (TB), 藤崎幸一 (B, TUBA),
マイケルズニコフ (DRUMS), 阿部隆 (B, G), 菊地隆洋 (PI), 外山恵子 (P, B),
ゲスト：藤原隆 (TP), 松本孝子 (Vocal), ドリーバー・カー (Vocal), ションデー・マクケルパー (Host/Hostess),
トークゲスト：ジャズ評論家 須川島久氏 司会：山口真樹

企画構成：外山真樹 舞台進行・照明：有賀・美共立

日本レイ・アームストロング協会 〒279-0011 浦安市浜浜4-7-15
TEL: 047-351-4484 FAX: 047-355-1004
ホームページ: <http://www.geocities.jp/MusicHall/2808/index.html>

2001年「ジャズ創世期の旅」チラシ

月4日だったことが分かったのです。お蔭でサッチモ生誕100年のお祝が100年目にあたる2000年から2001年の2年間にまたがって開催されることに！ エミー賞受賞の映像プロデューサー、ケン・バーズが制作、サッチモのジャズ史における役割を大きくフィーチャ

一した映像ドキュメンタリーもサッチモ100年を大いに盛り上げました。

NYリンカーン・センターが、ニューオーリンズ出身のウイントン・マルサリスを案内



役に、サッチモの旧誕生日から新誕生日まで、13ヵ月間にわたってコンサートを開催する…この情報を「USA TODAY」紙(1999年2月7日付インターナショナル版=写真前ページ中段)で知り、情報を下さったのが日本レイ・アームストロング協会理事で、当時夕刊フジにいらっしやっただ小泉良夫さんでした。この情報に触発されて、日本も「勝手に歩調を合わせて同時開催」と、日本レイ・アームストロング協会も『サッチモ生誕100年記念ジャズ創世期の旅』をシリーズ開催、後に『サッチモと辿るジャズの歴史』シリーズも開催しました。

瀬川先生と初期の例会からしっかり連携 WJFの企画ほとんどに監修のお願いまで

協会会員にもなっていたいでいるジャズ評論家、瀬川昌久先生に監修をお願いし、例会コンサートの経験を重ねることができ、また最近も2014年6月には瀬川先生の『JAZZ I LOVE』でサッチモを大きく取り上げていただく等経験を積み重ねさせていただいたことが、今回の紀尾井ホールでのサッチモ・コンサートの成功につながったと思います。

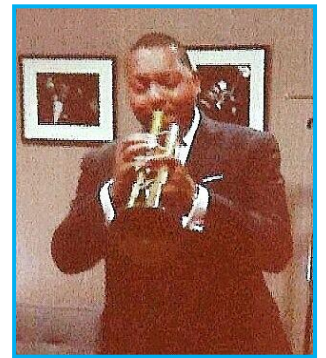
日本レイ・アームストロング協会の例会、サッチモツアー、サッチモ祭、クリスマスパーティー、10周年、15周年、21周年記念感謝の集い、ライブ、コンサート等に出席し、また長年会員とし会を支えていただいている皆様、スタッフの皆様、会の活動を応援して下さっているジャズファンの皆様、瀬川先生、そして何と言っても素晴らしい音楽を一緒に作ってくれるバンドの素敵な仲間の皆さん、全員で達成した快挙だと思います。企画のポリシー、進行表台本の制作に大きな力を頂いたWJF理事山口義憲さん。また、コンサート当

日ロビーでは、会員として会を支えていただいている、元ポニーキャニオン社長で大サッチモ・コレクター、佐藤修さんのサッチモ展(写真左)も開催…サッチモの世界を盛り上げていただきました。

私達が一番嬉しかったのは、お客様から「楽しかった…」なかには、「今まで見たコンサートで一番楽しかった」とまで言って下さる方も多くいらしたことです。

「快挙」を喜び「不思議なご縁」にも感激 サッチモの悪戯っぽい笑顔が浮かび…

日本のカーネギーホール、リンカーン・センターを目指すために、是非初の試みジャズをと発案して下さった紀尾井ホール制作部長の山口真一さんの英断、制作部マネージャーの小林昌幸さんの現場指揮。山口さんから相談を受け、初回は外山さんのジャズがいいんじゃない?と推挙して下さいました早稲田大学ハイソサエティー・オーケストラOBで



ジャズ界の名士、一関のジャズ喫茶「バイシー」店主、菅原正二さん、またメッセージを寄せて下さった同モダンジャズ研究会OB、タモリさんにも、感謝します。

日本のカーネギーホールやリンカーン・センターを目指す紀尾井ホールに、私達が15年前に触発されたリンカーン・センターのウイントン・マルサリスさんから、お祝いの言葉とナマ吹き(写真上)の「聖者の行進」が入ったビデオメッセージが寄せられたのも不思議なご縁で、この上なく光栄なことだと感激しています。

今回、前田憲男さん、白石信さん

他のゲストをお迎えし、露木茂さんの名司会をお願いできたこと。また、今年成人式を迎えたメンバーもいるような若者たち、早稲田大学ニューオールリンズジャズクラブにも出演して頂けたのは素晴らしいことだったと思っています!

サッチモを愛する皆様と共に一つの大きな夢がかないました! 天国サッチモのオー・イエス!という声と、イタズラっぽい笑い顔を感じずにはられません。



1999年、アテネ・フランセでの例会(写真上) 2014年、エビスビール記念館での「サッチモ祭」(同下)

日本のジャズ界にルイ・アームストロング再評価の波

大きな力となった瀬川昌久さんの存在と、日本ルイ・アームストロング協会の活動

新年を迎え振り返ってみると、日本のジャズ界に「ルイ・アームストロング再評価」の確かな波が生まれてきたように思われる。その大きな力となっているのが、ジャズ界の最長老ともいえる音楽評論家、瀬川昌久さん(91)＝日本ポピュラー音楽協会専務理事＝の存在。日本ルイ・アームストロング協会(WJF)の活動と相まって…。そんな一連の動きを振り返ってみた。

(構成:外山喜雄)

ジャズ・ミュージカルの振興に尽くし 2015年度長官表彰を受けられる

ジャズ評論家、瀬川昌久さんは、昨年12月11日、ジャズやミュージカルの振興に尽くすなど、文化活動で優れた功績を挙げたとして文化庁の青柳正規長官から2015年度長官表彰を受けられた。WJFとしても心からお祝い申し上げたい。この長官表彰は、瀬川さんはじめ人気グループEXILE(エグザイル)のリーダー、HIRO(本名・五十嵐広行)さんやユネスコの無形文化遺産「和紙」で知られる細川紙(埼玉県)の製作者団体、細川紙技術者協会の元副会長、関根好一さん(83)ら計43人にも贈られた。



文化庁長官表彰を受けられた瀬川さん(写真提供:一般社団法人日本ポピュラー音楽協会)



ルイ・アームストロング

6月14日には、入間ジャズクラブで瀬川さんが長年続けられている名ジャズ講座～ジャズを楽しむタバ～第14回『ジャズ入門講座&交流会』も開催された。テーマは「ルイ・アームストロング物語」。外山夫妻はここにも出演し、ホット・ファイブ時代の演奏を披露している(10～11面に詳細記事)。

9月11日には練馬区文化振興協会主催、これも瀬川さんプロデュースされている・ジャズ・シリーズ企画で、『ゆめりあジャズ VOL23—外山喜雄とデキシーセイントールルイ・アームストロングとデキシーランド・ジャズの世界』が繰り上げられた。

「ジャズジャパン」誌がSP音源大特集記事 復刻盤シリーズCD4枚組を瀬川さん監修

9月末には、瀬川さんの4ページにわたるサッチモ特集記事『ルイ・アームストロング SP音源で聴く巨匠サッチモへの道のり』が、「ジャズジャパン」誌62号の大特集記事として掲載された！(写真下)

サッチモのホット・ファイブ初録音(1926年11月12日)から90年を記念し、オリジナル78回転SP盤から音質を重視して直接収録された、瀬川さん監修のルイ・アームストロング大特集4枚組CD



「SP復刻盤シリーズ」の特集。SP音源から数々のクラシック・ジャズCDシリーズを企画発売してこられている、寺田繁さんのオーディオパーク社の新シリーズ。この4枚組のCDにSP音源を提供したのが、長年日本ルイ・アームストロング協会会員で、SPレコードコレクター山本俊兵さん。寺田さんほか、数名の方々の所蔵のSP盤も収録されている。(11面に詳報)

Jazz I Love…のジャズ人生70年超 ミュージック・ペンクラブ音楽賞の受賞も

瀬川さんは、先の紀尾井ホール初のジャズコンサートを始め、WJFが例会として続けてきたシリーズ・コンサートなど数々のイベントを監修してこられた。また、会員としてもWJFを初期から応援されWJFと強い絆で結ばれている。

2014年6月17日、瀬川さんの“70年を超えるジャズ人生”を振り返るともいえるコンサート『瀬川昌久プレゼンツ Jazz I Love—サッチモから日本のジャズソングまで』(日本ポピュラー音楽協会主催)が開催された。サッチモが、昭和初期の日本のジャズを含む、世界のジャズ界に与えた大きな影響や、ジャズで踊るタップダンス(写真上中央)…その華麗なるエンターテインメントの世界がテーマとなったコンサートで、外山喜雄さんらも企画構成をお手伝いしている。このコンサートで瀬川さんは翌2015年4月8日、第27回ミュージック・ペンクラブ音楽賞の“コンサート・パフォーマンス賞(日本人アーティスト)”の最優秀賞を受賞された。「ビーバップ以降が真のジャズ」というジャズ界の根強い偏見を打破するため、“サッチモ・ジャズ”の真髄を！という瀬川さんの熱い思いが脚光を浴びたのだった。

瀬川昌久プロデュース サッチモ！

2015年は、サッチモが1920年代、数々の名演をレコードに残し、世界のジャズを発展させたグループ「ルイ・アームストロング・ホット・ファイブ」の初レコーディングから90年にあたり、瀬川さんは精力的にコンサートや画期的なCD企画をプロデュースされている。

WJF21周年パーティー「感謝の集い」では 夢枕に現れたサッチモに変わり感動の挨拶

7月12日、上野精養軒で開催させていただいた日本ルイ・アームストロング協会21周年パーティー「感謝の集い」では、瀬川さんに会の発起人としてもご支援いただき、会員とジャズファンら多数が参加した。そのお客様300人の前で語りかけた瀬川さんの感激のスピーチは、外山夫妻にとっても一生忘れられないものになったという。「一番始めのご挨拶ということで何を…と考えていたところ、昨夜、夢の中に“パパ”ルイ・アームストロングが出てきて、お前はわしの歳に一番近いのだから、明日、わしの名前を冠した協会の集いに行って、わしに代わってみんなにわしのお祝いのメッセージを伝えてくれといわれたのです」と瀬川さん。この「感謝の集い」の様子は、光栄なことにジャズ界を代表する新聞「ジャズワールド」紙のトップとして掲載された(写真下)。

また、7月末から8月にかけて催されたサッチモゆかりの地、ニューオリンズとNY「サッチモの旅」は、このような“サッチモ再評価”の影響もあってか、同ツアー史上最高となる総勢30人が参加した。ニューオリンズのルイ・アームストロング国際空港では、現地TBCブラスバンドがウェルカム演奏、サッチモ・サマーフェストで“日本のサッチモ”外山喜雄とデキシーセイנטスの演奏が大うけし、最高の評価まで受けている。ニューオリンズからNYまで、その一瞬一瞬が鮮やかな想い出となる連続だった。



極めつけはあの「クラシックの殿堂」

紀尾井ホール主催の初ジャズ・コンサート

再評価の年、極めつけは12月19日、クラシックの殿堂「紀尾井ホール」が20周年を記念して始めて主催したジャズ・コンサート『ニューオーリンズ・ジャズと素晴らしいサッチモの世界』(1～5面に詳細記事)。日本ルイ・アームストロング協会が後援、企画段階から瀬川さんにご相談を重ねすばらしいコンサートとなった。リンカーン・センターのウイントン・マルサリスさんから紀尾井ホール20周年と初のジャズ企画に、お祝いのビデオ・メッセージが寄せられた。(4面参照)

また、振り返って見ると、2015年は銀座十字屋ホールで開催した『サッチモとポピュラーミュージックの世界—サッチモ流ポピュラーソングが世界を変えた！』(3月28日)で、WJFの例会がスタートしたのも忘れられない。この日、特別ゲストとして飛び入りした、NYCを中心にグローバルな活躍をしているダリル・シャーマンさん(p,v)は、外山夫妻に「素晴らしい

い！ このプログラムならウイントンのリンカーンセンターバンドのように、そのまま全米の文化センターを廻れますよ」と絶賛。まさにWJF例会としてふさわしいユニークな企画での一年のスタートだった。

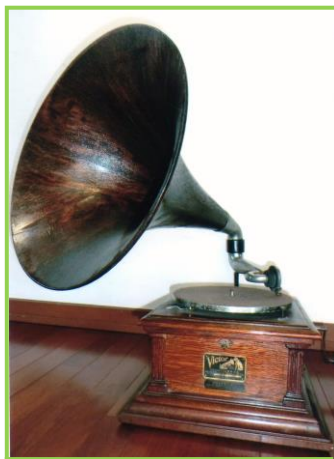
サッチモ・スカットの原点に迫るWJF例会 『春のシュビドゥバ』——2. 27銀座で開催

今年は、毎年恒例の新春デキシーランド・ジャズ・ジャンボリー(日本ポピュラー音楽協会主催)が、満席売上でスタートという、オールドジャズ界には幸先の良いスタート！

2月27日(土)にWJFは、昨年同様、銀座十字屋ホールでの特別例会を開催する。世界中を“スカットボーカル”ブ

ームに巻き込んだサッチモ初のスカット『ヒービー・ジービーズ』誕生

(1926年2月26日)90周年記念イベント、銀座アフタヌーンコンサート『春のシュビドゥバ』。瀬川さんもご出演、78回転オリジナルSP盤(Okeyレコード 8300-A=会員山本俊兵さん秘蔵写真上の右)をビクター社製ホーン(ラッパ型)蓄音機Ⅲ(3号機=会員 佐藤修さん秘蔵 写真左)で再生、1926年のヒービー・ジービーズ、1928年のウエストエンド・ブルースのオリジナルSP盤の生音も再生されるからお楽しみに。(詳細は11面)



蓄音機に付けられていた米製造会社プレート

このようにルイ・アームストロングがジャズ界で話題になっている昨今、瀬川さんのサッチモへ寄せる熱き想い…そして、会員、ジャズファンの皆様に支えられて続いてきている日本ルイ・アームストロング協会の熱き想いが一緒になって、素晴らしいサッチモ・アプリケーション・イヤーが続いている。

速報！ 1月20日に、(瀬川さんが60年に及ぶ文筆活動の中から、ジャズにまつわる文章を自選された著作、『瀬川昌久自選著作集1954～2014チャーリー・パーカーとビッグバンドと私』河出書房新社)が発売されました。

＜仙台の佐々木孝夫さんとあのジャズメン人形＞

仙台でジャズバーJazz Me Blues Nolaを運営される佐々木孝夫さん、偶然10数年前に、黒人ジャズメン人形のセット2400セット位を友人から格安で譲られた。ニューオリンズ音楽が大好きだったため2005年、同地がハリケーンによる大被害を受けた際、この人形を定禅寺のジャズ祭で販売しニューオリンズを支援しようと思いついた。そんな折、2005年10月の私達WJFのニューオリンズ支援「緊急サッチモ祭」を、テレビニュースでご覧になり連絡を下さり、以来90万円を超える売り上げを義捐金として、ニューオリンズにご寄付下さっている。



津波で楽器をなくした子供たちがいたら支援をしたいとニューオリンズから連絡があった際、佐々木さんにご相談、楽器をなくした気仙沼スウィング・ドルフィンズのことがわかった。翌年、ニューオリンズの子供たち来日の際も、佐々木さんに東北の予定をお願いした。この人形は、2009年WJFの15周年感謝の集いで、ご出席の皆様へのお土産としても使わせていただいた！こんなご縁のあった人形が、偶然、今回、紀尾井ホールの舞台そでに飾られていた！

(外山=12面にも関連記事)

～ジャズを楽しむタベ～入間で第14回『ジャズ入門講座 & 交流会』 瀬川昌久さんが外山夫妻と「ルイ・アームストロング物語」

長年、瀬川昌久さんが講師となって進めている～ジャズを楽しむタベ～第14回『ジャズ入門講座 & 交流会』が昨年6月14日、埼玉・入間市久保稲荷の久保稲荷公民館で開催された。今回のテーマは「ルイ・アームストロング物語」…となれば当然、外山喜雄・恵子夫妻にも声がかかる。“入門講座”とはいえ、さすが両雄並び立つという感じでアカデミックかつ、サッチモ・ファンの溜飲を下げる素晴らしいイベントだった。

第1部は「CDで聴くアームストロングの卓抜したプレイとその影響」。1920年代のサッチモのジャズが、いかにその後のジャズに大きな影響を与えたか、瀬川さんが力説。ルイがキング・オリバーに呼ばれ、第2コルネット奏者としてシカゴで録音された『Dippermouth Blues』(1923年)。このスコアがビッグバンド用に編曲された。曲名は『Sugarfoot Stomp』(1925年)。これがまたまた大ヒット！この曲がそのまま後世に、そして日本にまで影響を及ぼした足跡が凄い。まず、『Sugarfoot Stomp』(1937年)は、ベニー・グッドマン楽団でハリー・ジェイムス(tp)、そして『Dippermouth Blues』(1940年)では、グレン・ミラー楽団で御大自らがトロンボーンでトランペットの演奏をそっくり再現！ また、瀬川さんがつい最近、これを“発見”して驚いたという日本版『Sugarfoot Stomp』(1987年)。ここでは、藤家虹二と高橋達也 & 東京ユニオンで鈴木孝一(tp)が素晴らしい演奏披露している。なんと半世紀以上も伝承されていたのだ。

フレッチャー楽団に在籍したのち、シカゴに戻ったルイが、初めて自己のバンドで数々の名演を残したグループ、ホット・ファイブのCDから、『Cornet Chop Suey』(1926年)、スキヤットの走りとして知られる『Heebie Jeebies』(1926年)では、恵子さんのバンジョーの伴奏で、楽譜を落として慌ててスキヤットに入るシーンを外山

さんが実演する解説も入った。最後は、ホット・ファイブの『West End Blues』(1928年)。瀬川さんの解説では、1934年(昭和9年)、ディック・ミネが『ダイナ』を日本語で歌い、吹き込む際、南里文雄のホット・ペッパーズが伴奏することになり、イントロでこのカデンツァのフレーズの前半を演奏している。



瀬川昌久さん(左)と外山喜雄さん(右)

第1部の締めくくりは、外山夫妻によるスライドショーとトークや外山夫妻撮影のニューオーリンズでのジャズ葬式の写真の数々にプラスバンドの奏でる葬送曲をかぶせ、夫妻のニューオーリンズ行きや当時の写真も…楽器の贈呈、ハリケーン・カトリナ、東日本大震災、日米子供たちのジャズ交流…何とも盛りだくさん。



ルイ・アームストロング・ホット・ファイブ

第2部は、同じ会場でテーブルと椅子の配置を変え、ソフトドリンクとお菓子付きの交流会、外山夫妻による“ミニコンサート”…とリーフレットにあったが、なんとこのプログラムには書かれていなかった



鈴木孝二さん(c)と藤崎羊一さん(b)が“特別出演”(写真上)し、ミニどころか、セインツ、フル回転に近づいた。第1部で瀬川さんが取り上げた、若き日のサッチモの名演を生でという趣向。

びっくりしたのは、外山さんがステージ前に並べたコルネットやトランペット3本の楽器(写真左)。いずれもビンテージもので、キング・オリバー楽団時代サッチモの使った初期のコルネット(ハリーBJ社製)、ホット・ファイブ時代に使用



びっくりしたのは、外山さんがステージ前に並べたコルネットやトランペット3本の楽器(写真左)。いずれもビンテージもので、キング・オリバー楽団時代サッチモの使った初期のコルネット(ハリーBJ社製)、ホット・ファイブ時代に使用

していたBb-Aの変換バルブが付いたというトランペット(ブッシャー社製)、1928年頃、使っていたような細長いトランペット(コーン社製)。これらのサッチモが吹いた当時の楽器で、1920年代の代表曲の演奏が続いた。

「コルネット・チョプ・スイ」、「タイト・ライク・ジス」、「ウエストエンド・ブルース」、「ポテト・ヘッド・ブルース」、「ディア・オールド・サウスランド」…そして、恵子さんのバンジョ



ーをフィーチャーして、「世界は日の出を待っている」(写真左)、最後はやはりニューオリンズのパレードの人気ナンバー、「セカンドライン」。おなじみの傘の登場し、人間ジャズクラブのジャズを楽しむタベは、最高の盛り上がりを見せて終わった。

ルイ・アームストロング大特集4枚組CDの「SP復刻盤シリーズ」

ホット・ファイブの初録音(1925年11月12日から90周年記念)4枚組「SP復刻盤シリーズ」。瀬川昌久さん監修。ジャズレーベル・オーディオパークから発売された4枚組は、サッチモがキング・オリバー楽団でデビューした1923年の録音から、1947年まで、SP盤から復刻した貴重コレクション。



各特集CDの内容は、次の通り。

①ホット・ファイブ結成90周年記念、デビューから人気者へ(1923~1936)

- ◆ルイ・アームストロングがデビューから人気者になる過程
- ◆どんなデビューで、どんな下積み時代があったのか
- ◆ニューヨークのジャズメンに大きな影響を与えた音楽生活

②ホット・ファイブとセブン(1925~1928)

- ◆ルイ生涯の最大の遺産。ホット・ファイブとセブン
- ◆当時のSPレコードで忠実に再現
- ◆1920年代ルイの意気がそのまま甦る

③スタンダード・ナンバーを唄う(1929~1938)

- ◆ジャズ・ボーカルはルイ・アームストロングの歌から始まった!
- ◆ルイがいち早く歌い、それを後続のシンガーも歌ってスタンダードに!
- ◆現在も歌われるジャズ・スタンダードの原点がここにある!

④デッカ・オーケストラ・セッションズ(1936~1947)

- ◆デッカに録音したルイのオーケストラ・セッション、加えてビング、ミルス・ブラザーズ、エラなどとの共演も収録!

◆ルイの多彩な側面を捉えたデッカ時代の傑作集!
(発売は2015年9月30日)

お問い合わせ:オーディオパーク
TEL&FAX:03-3704-9110
audio@audiopark.gr.jp

是非、昼下がりの銀座… 特別例会にご出席を!!!

サッチモの初スカット誕生から90周年記念!
日本ルイ・アームストロング協会

特別例会『春のシュビドゥバ』

2月27日(土)午後2時30分開場、午後3時開演
銀座十字屋ホール(銀座松屋前、大和証券9階)

「ヒービー・ジービーズ」の録音中、歌詞カードを落とし、とっさにユビドゥバ…と歌ったのが大ヒット、アメリカ中がスカットブームになった。これが1926年2月26日。このサッチモのスカット誕生は、まさに“ジャズ界の2:26事件!”なのです。

日本ジャズ界を代表する、スカット名人勢揃い!

出演: 外山喜雄とデキシーセインツ
ゲスト: ギラ・ジルカ(vo)、丸山繁雄(vo)、細野よしひこ(g)
特別ゲスト&監修: 瀬川昌久
(ジャズ評論家 文化庁長官賞受賞)
司会: 山口義憲(会報「ワンダフルワールド通信」編集長)

サッチモ、エラ、ロイ・エルドリッジ、ディジー・ガレスピー…ディズニの仲間たちから、11pm、由紀さおりさんの『夜明けのスカット』まで!!

サッチモの初スカット78回転オリジナルSP盤(Okeyレコード8300-Aほか、会員山本俊兵さん秘蔵)をビクター社製ホーン(ラップ型)蓄音機Ⅲ(3号機=1904年製、会員 佐藤修さん秘蔵)で再生、1926年のヒービー・ジービーズ1928年のウエストエンド・ブルースのオリジナルSP盤の生音もお聴きいただけます!(9面に写真と関連記事)

ぜひお出で下さい!! 5000円(WJF会員割引4500円、非会員4700円、1ドリンクとサッチモ関連グッズ(サッチモ金太郎飴=会員、水越有造様ご提供=&サッチモ・コースター)のお土産付きです。

**ご寄付と嬉しいお手紙
ありがとうございます**

- ◆オーディオパーク、寺田繁様 (世田谷区) 8万円
- ◆荒井正雄様、京子様 (会員、さいたま市) 3万円
- ◆東京九段ライオンズクラブ様 (千代田区) 5万円

<宮城健さんからまた素敵なお便り>

今年も仙台定禅寺ジャズへ行ってきました。(2015. 09)

「ジュニアジャズミーティング in JSF」は大盛況で1800人の客席は一時立ち見ができるほどでした。嬉しかったのは出演8バンドにはWJFとご縁の深い3バンドが含まれていて、「ブライトキッズ」はトップバッター。「スウィング・ドルフィンズ」は3番目。そして「石巻ジュニアジャズオーケストラ/スウィング・リバ



テイ・パイレーツ」は7番目でそれぞれ見事な演奏を聴かせてくれました。

『定禅寺ストリートジャズフェスティバル in 仙台』の第25回開催記念企画として

開催されたそうで、佐々木孝夫様は開催当事者として忙しくされていましたので、私の写真をご参考に添付して送ります。

(写真は、『軽やかな演奏で観客を魅了した気仙沼市の「スウィング・ドルフィンズ」=昨年9月13日午後0時40分ごろ、仙台市青葉区の東京エレクトロンホール宮城で)

<紀尾井ホール制作部長、山口真一さんから>

…ジャズと紀尾井ホールとの音楽的な相性を振り返っていたのですが、トランペットは鳴りに鳴ってました！ 紀尾井

ホールは楽器だなど思いました。トロンボーンも鳴ってましたし、クラリネットも音が本当にきれいに響いていました。観客との関係は、家族的な雰囲気が充満でした。ということで、どういう形になるかはわかりませんが、ジャズの方々にも是非使っていただきたいと確信した次第です。



<山口さんとジャズメン人形の不思議なご縁>

今回のジャズコンサートの企画を立ち上げて下さった紀尾井の山口さんは、仙台に赴任していたことがあり、定禅寺のジャズストリートで、可愛いジャズメン人形を売っているブースを

偶然見つけて、これを購入したそうです。その人形が、あの、紀尾井のステージ袖のコーナーに、飾ってあったのです(写真左下)。



佐藤修さんからの2016年賀状

きっかけでした。

紀尾井の担当になった時、ホール舞台袖の人形コーナーに飾ったそうです。ジャズコンサートも、この人形が袖から見守ってくれていた訳です。

佐々木さんは、この人形を売って、私達にニューオリンズへの義援金を贈ってくれていたのです(9面に関連記事)。

この写真を見た佐々木さん、「なんか人数が足りないようですね」といって、山口さんにドラムとギターの2体を送ってくれたとか。またまたサッチモのイタズラのようですね。(外山)

募集中

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい！！

また皆様のお知り合いの方々に

ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

=WJF年会費=

- 一般会員(General Membership) ¥6,000
- 学生会員(Student Membership) ¥3,000
- 賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店

普通:5175119「ワンダフルワールド」

お問い合わせは:WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax : 047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン:Yahoo,Google で

<検索>ルイ・アームストロング

<http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf>

編集長から

“クラシック音楽の殿堂”として名高い東京の「紀尾井ホール」で、同ホール主催初のジャズコンサートが外山喜雄・恵子夫妻とデキシー・インツ、ゲストのみなさんによって開催されました。テーマは紀尾井クリスマスコンサート2015「ニューオリンズ・ジャズと素晴らしきサッチモの世界」▼「紀尾井ホール」は「三イヤーコンサートでおなじみのオーストリア・ウィーンの楽友協会大ホールに似た感じのホールで、音響が素晴らしい」と外山喜雄さんが感激していました ▼クラシック音楽の殿堂でジャズが演奏されたことで有名なニューヨークのカーネギーホールでのベニー・グッドマン楽団の演奏のライブ版(1938)を聴くと、会場の拍手が感動的です ▼紀尾井ホールの観客800席(満席)のうち、100名はWJFの会員などのジャズファンで700名は紀尾井ホール友の会会員のクラシックファンでした ▼そして、クラシック鑑賞時にはありえない、曲にあわせての手拍子、リズムにあわせて身体をスイング、ソロ演奏に対するその都度の拍手など、全くジャズコンサートトライブ会場状態が出現してありました。みなさん、本当に楽しんでいただいていた嬉し限りでした。(山)